

バルト（1915–1980）によって呈示されたテキスト概念は、従来、作品の読解における「読者」の役割に光を当てるものとして評価されてきた。しかし、「テキスト」をそれとして成り立たしめているのは、読者の存在のみではない。そこには「テキスト」をそれ固有の仕方でも形成する「作者」の存在が必要とされる。本発表は、バルトによる文学の「形式 (forme)」の概念に着目することで、「テキスト」における作者の役割を考察する。

バルトは 1960 年代に入り、記号学を受容とともに、文学における「形式」の重要性を主張する。文学の素材である言語は、それ自体で独立した一つの意味生成システムである。そのため作品の言語は、作品そのものから切り離されてもなお意味を生じうる。これによって、文学的な言語活動とその他の言語活動を区別することは不可能であり、また作品にもたらされる意味内容に基づいて個々の作品を規定することはできないといえる。それでは、文学と他の言語活動を区別するものはなにか。バルトはそれを「形式の独創性 (originalité)」であると主張する。

「形式」とは、作者が作品の言語活動に付与する一定の秩序のことであり、これによって、作品の意味内容は言語システムによってもたらされる偶然の産物としてではなく、意図されたものとして呈示される。形式はいわば作者と読者とを媒介する経路であり、この経路をとおしてのみ両者はひとつの作品を共有しうる。そしてこの共有の仕方を文学独自のものとしているのが、「形式の独創性」である。形式の独創性によって、作品のメッセージは読者にたいするひとつの「問い」として与えられ、作品の言語活動は「間接性」を帯びる。作者は、自らが関与不可能な意味内容によって自らの作品を規定するのではなく、むしろ言語の組み合わせや配置の変化、すなわち独創的な形式の構成によって、伝えるべきメッセージの「正確さ」を追求すべきである。これによって、作品は読者に特定の意味内容の読み取りを強要することなしに、読者の読みを方向づける。このことからバルトは、読者及び作者が作品に直接関与しうるのは、主題や内容によってではなく「形式」をとおしてである、と主張する。また逆に、以上のような形式の独創性こそが文学を規定するものである。

仮にテキスト概念が言語システムの自足性にのみ依拠して主張されたのであれば、「テキスト」は特権的な作者を必要としないと同時に、特権的な読者を持つこともできない。しかしバルトのテキスト論は、「テキスト」形成における「読者」存在の必要性を明らかにした。ただし、そこには読者の作品関与を可能にする形式の概念が必要とされる。文学は「テキスト」として多様な読みを許容しながらも、その形式によってそれは文学固有のコミュニケーションの成立を促している。「テキスト」の意味内容は、形式という経路を通じて編み上げられるべきなのである